

〈日仏演劇協会会報巻頭言〉

68年以来の演劇変革を想う

伊藤 洋

18年4月下旬に、平田オリザ作・演出の『革命日記』（97年初演）の再演（青年団とその育成機関“無隣館”の若手による）をこまばアゴラ劇場で観た。この作は以前にも一度見て感じていたが、フランスで一時流行っていた「日常演劇」の最たるものと改めて驚嘆した。そして6月末には同作家の新作・演出『日本文学盛衰史』（原作：高橋源一郎、青年団の第79回正式公演）を観て、さらに日常演劇の太い幹を感じたのだった。

『革命日記』は都市近郊のマンションらしき若者夫婦家庭のリヴィングが舞台で、革命を目指す過激派のアジトである。表面はおとなしく日常を過ごしているが、今夜は空港突入計画を話し合っている。そのひそかな会議がしばしば近隣の人たちが町会の連絡でやって来る。結局最後は町で仲間の一人が誰かに襲われたという知らせに一同はそっと分かれて出て行く。この終わり方は平田の劇がしばしば「静かな劇」と呼ばれるゆえんを明示するかのようである。

『日本文学盛衰史』は森鷗外、田山花袋、島崎藤村、北原白秋ら明治の文豪たちが北村透谷を筆頭に一人ずつ亡くなっていくその葬儀の様子から、時代背景、文学傾向の移り変わりを描き出していく。「静かな演劇」の流れに乗ってはいるが、途中でラップ・ミュージックが出て来たり、最後（4場）の夏目漱石の葬儀後には全員で踊りまくるシーンがある。平田オリザの「静かな劇」の終焉を思わせるものであった。

* * *

両作とも平田の主張する「現代口語演劇」の流れに沿ったものであるが、思い出されるのはフランスにおける「日常演劇」*théâtre du quotidien*の出現である。俳優が日常的な会話をしながら静かに過ごす様子を描くという日常演劇がフランスで登場し一世を風靡したのは1970年代、つまり68年のあの「5月革命」*Événement de mai*以後間もなくのことであった。あの騒動の演劇変

革についてはすでに多く語られているが、その変革の一つとして「演劇のグローバル化」があった。

68年の演劇変革への動きは、66～67年に来仏していた世界各国の新しい演劇上演の影響を受けていた。「リヴィングシアター」も「パンと人形劇団」もすでにフランスで上演されていた。演劇のグローバル化は68年5月以前に行われていた。

コメディ＝フランセーズでさえ、もはや17世紀などの韻文のせりふを朗々と響かせながら語る旧来の舞台はほとんど見られなくなった。俳優たちがごく日常的なせりふをわめき立てるのではなく静かに語る、というフランス演劇らしからぬ演劇「日常演劇」の生まれる下地は、68年5月に作られていたのではなかろうか。

時代はすでにグローバル化しており、フランスでも日本でも68～69年に同じように学生運動があり騒動があった。フランスで日常演劇と言われるものが生まれたのは1970年代である。その代表作家ジャン＝ポール・ヴェンゼル *Jean-Paul Wenzel* の人気作『アゴンダンジュを遠く離れて』*Loin d'Hagondange* の仏初演は77年（75年作）である。その前後にミシェル・ヴィナヴェール *Michel Vinaver*、ミシェル・ドゥーチュ *Michel Deutsch* らが輩出する。

その流れに乗ったとも思われる平田オリザの「現代口語演劇」の人気は少し遅れて90年代である。世界演劇のグローバル化に符合しているように思える。ただフランスではこの日常演劇の流れはその後途絶えたが、日本では平田オリザが主流になってなお続いていると考えられる。今度の『日本文学盛衰史』の公演で、彼はその方向を変えようと考えているのだろうか。ここにもグローバル化の流れがあるようである。

(日仏演劇協会会長)